

東北大学東北アジア研究センター・シンポジウム/地域研究コンソーシアム連携シンポジウム

内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」

——モンゴルと華南の視座から——

おか ひろ き
岡 洋 樹

- I シンポジウムの趣旨
- II シンポジウムの概要
- III 「中国」・漢族・「少数民族」
- IV 今後の課題

I シンポジウムの趣旨

東北大学東北アジア研究センターは、2002年3月以来、共同研究プロジェクト「東北アジア世界の形成と地域構造」を立ち上げ、東北アジア地域研究の領野開拓を目的に、地域に関する様々な課題を取り上げた一連のシンポジウムを企画してきた。各回のテーマを挙げれば、以下のごとくである。第1回「東北アジア地域論の可能性」(2002年3月)、第2回「東北アジアにおける民族と政治」(03年3月)、第3回「中国研究の可能性と課題」(04年3月)、第4回「開国以前の日露関係——日本人漂流民、ロシアの東方進出、日本の対露政策」(05年3月)、第5回「地域協力から見えてくる地球温暖化」(06年3月)(既刊の各回の報告論文集については、末尾の文献リストを参照されたい)。ここに紹介しようとするものは、その第6回目として2007年3月10日に開催されたシンポジウム「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの『中国』——

モンゴルと華南の視座から」である。各回のシンポジウムのテーマからもうかがわれるように、本研究が対象とする東北アジアとは、中国、ロシア、モンゴルを含むユーラシア大陸の東北部をしめる広大な空間を指す。既存の地域枠組みとの関わりでいえば、中国、朝鮮、日本からなる東アジアと、モンゴル、ロシアシベリア、中国東北部を含む北アジアを統合した概念として設定されており、シンポジウムにおける報告や議論のかなりの部分が、これらにまたがる形で組み立てられている。

ではなにゆえに既存の東アジアや北アジア、あるいは中華世界、スラブ世界といった地域概念を超えた東北アジア地域を研究枠組みとして設定する必要があるのであろうか。地域概念というと、「儒教文化」の東アジアや、遊牧狩猟文化の北アジアというように、何らかの文化的要素の共有を要件として語られることが多い。しかし地域における人間活動のダイナミズムは、むしろ異なる文化間の共生・対抗関係のなかにこそ現れるものである。筆者の専門である東洋史に引きつけていえば、2000年にわたるユーラシア史の底辺に中国の定着農耕世界と北方の遊牧世界の間で展開した対立・交流・征服・文化

的浸透などの複雑な歴史過程があったことは、古くから指摘されているところであるし、近現代において主として北アジア（満蒙）を舞台として展開したロシアや日本の帝国主義的拡張政策が、歴史研究上の課題群を構成していることも論をまたない。さらにいえば「中国」を自称する王朝群の多くが、北アジアの遊牧民や狩猟・農耕民の征服活動によって成立したものであることも周知の事実には属する。また17世紀のシベリア征服によって登場して以来、ヨーロッパ勢力としてのロシアは東北アジア地域史のまさに当事者として存在してきた。だから東北アジア地域（史）を成立させるものは域内の文化的共通性ではなく、異質な他者が対面することによって地域が共有する歴史的課題群なのだといえよう。戦前における日本の大陸への関与も、日本がかかる課題群を生成する当事者としてあったことを示す。かかる認識に立つとき、中国文明を中核として同心円状の構造を想定する東アジア地域や、ロシアを中心としたスラブ世界といった既存の地域枠組みとは異なる地域概念が必要と考えられる。

総じていえば、本共同研究は、文化的共通性に立脚した地域概念の定立を目指すのではなく、むしろ文化的多様性が織りなす国家・民族関係の展開が生み出す課題群としての東北アジア地域論を構想するのである。

今回のシンポジウムは、「中国」を素材としながらも、このような東北アジア地域の構造的問題を強く意識した構成を取っている。筆者は、主催者側の一員として本シンポジウムの企画に関わってきたが、本稿では、東洋史（モンゴル史）を専門とする一研究者として、やや突き放したまなざしをもって、筆者の立場からの批評

を行いたいと考えている。

本シンポジウムは、華南とモンゴルでそれぞれセッションが構成され、文化人類学と歴史学を専門とする研究者による報告が配置されている。そもそも華南のタイ、ミャオ、リーと、モンゴルという4つの「周辺民族」が共有するのは、漢族に対してマイノリティーを構成するという事実にすぎず、すべてが共通の文化的・歴史的要素をもつわけではない。他者としての漢族を媒介として初めて成立する議論の構図の政治性は明らかである。問題は、個別の民族を対象とする研究が、一方の立場から「中国」全体を定義してしまいかねない危うさを含む点にある。民族の歴史的・文化的存在様態が異なるとすれば、それはマジョリティーとしての漢族、ひいては「中国」との関係のあり方の相違を生み出すはずである。しかしその違いの意味は十分に認識されているだろうか。これがさしあたり南と北を対比的に配置した理由である。

第2の論点は、「内なる他者」という言いように関わる。それが示唆するのは、単に中国内部の異民族としての少数民族という意味だけではない。「中国」あるいは漢文明との接触のなかで、民族の意識のなかに生み出される「中国」の存在感が民族のアイデンティティーと歴史認識に生み出す微妙な陰影である。換言するならば、「内なる他者」としての「中国」が民族意識のありように与える影響とその役割という問題である。

すなわち本シンポジウムが視野に収めようとするものは、「中国」のなかの他者としての「少数民族」であると同時に、「民族」の心性に介入する他者としての「中国」でもある。

Ⅱ シンポジウムの概要

まず本シンポジウムのプログラムを提示し、セッションごとに報告内容を紹介する。

(1) 華南セッション——

司会 上野稔弘（東北大学）

長谷川清（文教大学）「雲南タイ族の事例——

中華世界における『宗教』と『民族』

曾士才（法政大学）「貴州ミャオ族の事例——

清末から現在に至る学校教育から見えてくるもの」

瀬川昌久（東北大学）「海南島リー族の事例——清末から現在に至るリー族と漢族諸集団の相互関係」

コメント 三尾裕子（東京外国語大学）

(2) モンゴル・セッション——

司会 栗林均（東北大学）

柳澤明（早稲田大学）「清代モンゴル東部辺縁地域における「民族」の接触と変容」

広川佐保（新潟大学）「中華民国期における熱河省の土地政策について」

ボルジギン・ブレンサイン（滋賀県立大学）「ハラチン・トメド＝モンゴル人と近現代モンゴル社会——地域エリートの選択」

コメント 岡洋樹（東北大学）

1. 華南セッション

華南セッションでは、長谷川清氏（東洋史）によって雲南のタイ族が、曾士才氏（文化人類学）によって貴州のミャオ族が、瀬川昌久氏（文化人類学）によって海南島のリー族が取り上げられた。

長谷川報告は、まず少数民族のエスニシティーやアイデンティティー形成における清朝の帝

国支配の問題の重要性や、タイ族における漢文化と「上座仏教」の2つの「文明化」装置の存在に目を配りつつ、13世紀以後タイ族が雲南南部にムンマオ王国として国家を形成したこと、その漢秩序への編入再編を意図する中国が、これを征服して王朝統治下の土司としたこと、土司は、漢族の先進性を認めたくえで、自らの文化的な優位性・優越性・正当性の根拠を漢民族あるいは漢文化に求める意識を有し、これがエスニシティーの基本になり、このような意識がビルマ側のタイ族との境界を形成していること、そして漢文化の受容は前近代は土司階層に限られており、本格化するのは民国期のことであったことを述べる。また、中国のタイ族の仏教寺院の建築様式が中国風の建築で、国外の寺院建築と違いをみせることなど、漢文化の浸透の状況が指摘された。

続く曾報告は、貴州省のミャオ族における文字の創作・普及活動に関わったミャオ族エリート層を取り上げる。中国では、清末に近代教育が始まり、民国期には同化教育が行われたが、解放後1950年代には民族文字の創出とバイリンガル教育が試みられた。まもなく始まる左傾化により中断した後、1981年から今旦・欧徳祥ら知識人によるミャオ語教育が再開される。賛否両論のなかで実施された実験教育は成功したが、基本的にはそれが多数派言語への移行を目的としたものであること、現実には少数民族の言語・文字の使用を保証する体制は貧弱であり、財政の逼迫から実験が縮小・廃止されていることが述べられた。

瀬川報告は、海南島のリー族を取り上げる。この民族の場合は、国家統合の経験をもたず、政治的統合性を欠く分散した小集団が内地から

の移住者と個別に関係を結んできたことが指摘される。同時に民族衣装などの表象とはうらはらに、リー族と称する人々の内部は多様であり、民族識別以前に民族意識が存在したかは疑問であるとする。そして1930年代にリー族を調査したスチューベルの観察を参照しながら、そこには「漢」対「黎」の二元構造ではなくて、より多元的で複雑な過程が存在することを指摘する。さらに解放後の民族識別によっても、民族籍と文化的な属性は乖離していること、一方で「儋州市符氏志」を用いて、符氏の宗親会組織の活動が、「民族」やローカリズムを超える姓氏の統合原理による連帯をつくり出しており、費孝通がいうような周辺民族の中国への内化プロセスとも軌を一にする性格をもつことが指摘される。

以上の3報告を受けた三尾氏のコメントは、台湾を例としながら、上記3民族が中国性を内在化させているのとは反対に、台湾の人々が非中国人＝台湾人としての自意識をもつことで、中国人が自分のなかから中国性を他者化するという逆のプロセスが存在することを論じた。また三尾氏は、ゲルナーやアンダーソン等の理論的研究の中国を対象とした時の有効性、民族形成以前の、民族の基礎になるものがいかなるものなのか、産業化の有無に拘わらない民族観念の存否について、問題を提起した。

2. モンゴル・セッション

モンゴルを扱った午後のセッションでは、東洋史を専門とする3人の研究者による報告が行われた。

柳澤報告「清代モンゴル東部辺縁地域における「民族」の接触と変容」は、中国内モンゴル東北部およびこれに隣接する黒竜江省西部の

「モンゴル東部縁辺地域」を題材として、モンゴル、満洲、ダグール、キルギス、エヴェンキなどの諸民族の共存の様態を報告するものである。この報告が扱う地域住民は、清代に八旗組織に編成されており、盟旗制度下にあったモンゴル諸地方とは異なる独特の民族構成を有する。漢化の進行もあいまって、言語的にも文化的にもほとんど差のないこれらの民族が、なおも相互の民族的出自意識を維持していることが報告され、モンゴル族が漢族以外の他の諸民族との関わりのなかで自己認識を作り出していることが指摘された。

広川報告とブレンサイン報告は、同じ地域を対象として取り上げている。広川報告「中華民国期における熱河省の土地政策について」は、1920～30年代の熱河省（モンゴルにとってはジョーオダ盟とジョソト盟）における近代的土地所有権確立を企図した「経界問題」、すなわち地稅徴収のための土地の権利関係確定作業を素材としながら、外部からの熱河省当局による土地政策が、モンゴル人社会と漢人移住農民が保っていた地域社会関係のバランスを崩すことで対立の火だねを持ち込み、漢人社会が熱河省当局と結びついてモンゴル人の地位を危うくするなかで、33年に熱河が日本に占領され、土地整理事業は頓挫したことを論じた。

ブレンサイン報告「ハラチン・トメド＝モンゴル人と近現代モンゴル社会——地域エリートの選択」は、20世紀初頭におけるハラチン・トゥメド地方のモンゴル人有力者の動向を論じたものである。内モンゴル最南部に位置するこの地方は、早くから漢人移住者の入植地となり、モンゴル人社会と漢人社会が同じ地域で密接な関係を作り出していた。ブレンサイン報告は、

トメド左翼旗の有力者で張作霖に義父と呼ばれた海雲亭（モンゴル名ハイロン）、張作霖の部下であった李守信や胡宝山、外モンゴルの独立運動に重要な役割を果たしたハラチン右旗出身のハイサンなど、「多数派を占め、かつ地域の指導権を掌握することに成功した漢人集団のなかで、モンゴル人社会の集団としての結束を図ることができず、明確な行動指針を示せないまま時代の流れに飲み込まれていった」地方有力者達を取り上げて論じた。

続く岡によるコメントは、20世紀が清代の王公統治が解体し、民族が成立し、国民国家の形成が図られた時代であったとする理解に立ちながら、このプロセスにおいて帝国統治の下では統治構造を直接定義するものではなかったエスニックな違いにナショナルな意味が付与され、モンゴル人と漢人との関係を対抗的な民族間関係へと転化させたこと、この過程で生じた文化的な変容が、エスニックな自己認識のなかに疎外体としての「内なる他者」を生み出したことを論じた。

Ⅲ 「中国」・漢族・「少数民族」

民族の自己認識が、他者との関係をめぐる累積した記憶によって構成されるとすれば、「歴史認識」はその核心にある。今回のシンポジウムでの報告が、いずれも民族の歴史を意識しながら議論を組み立てていることにもそれは現れている。つまり民族表象は「歴史的」なものである。しかし、歴史とは、過去の出来事そのものである以上に、現在の人々の脳裏にある過去に関わる記憶でもある。つまり現代における民族の存在様態が、他者との関わりにおいて過去

の記憶を民族のアイデンティティの表象として構成させるのだといえるだろう。

本シンポジウムの各報告において取り上げられた諸民族を、「多民族国家」中国の「少数民族」としてみる議論の枠組み自体、「主体民族」＝マジョリティーとしての漢族との間に作り出される「他者」間関係が議論の本質部分を構成していることを示している。ここから、いくつかの論点が生ずる。

第1の論点は、漢族の「周辺」に配置される民族それぞれの歴史や自己表象は、「中国」との関係のあり方に多様なバリエーションを生み出すということである。この点は、たとえばシンポジウムにおける瀬川報告が扱ったリー族の事例と、モンゴルの事例との対比に鮮明に現れている。リー族の事例が、漢族との境界の曖昧さや文化的融合（あるいは未分化）を議論するうえでの好適な事例であるのに対して、モンゴルの場合は、漢族とのより対抗的な関係が意識されやすい。一方、曾報告が取り上げたミャオ族の事例は、漢族との対抗性を強く意識したものであったが、この点でモンゴルの事例と共有する課題はより大きい。さらに長谷川報告が主題とするタイ族の場合には過去の国家統治の経験や、国境を越えた分布という点でモンゴルと類似した状況をもつ一方で、中国の統治との関わりで土司が正当性を主張するような統治の正統性の提示のあり方に相違を見いだすことができる。リー族やミャオ族・タイ族とモンゴル族の同時代的状況や漢文化との関係のあり方の違いは、民族成立の歴史的過程の違いを示唆している。ここで注意しなければならないのは、「少数民族」という問題の枠組み設定が、このような差異を後景へと後退させてしまうという点で

ある。リー族のような事例をもとに「中国」を論じれば、少数民族区分自体の実体性に疑問のまなざしが向けられることになろうし、逆にモンゴルからみれば「中国」の統合論理への違和感がより意識されることになるだろう。また「中国」へと収斂し、回収される民族表象のあり方は、柳澤報告が指摘したように、個々の民族にとっての漢族以外の他者との関係や、そこから構成される民族意識の独自のあり方を覆い隠してしまう面も注目される。柳澤報告は、「内モンゴル東部縁辺地域」において、モンゴル族がダグール族やキルギス族、あるいは他のモンゴル族コミュニティとの関係のなかで民族意識を維持している事例を紹介している。柳澤報告が扱ったのは、清代において八旗組織に編成された地域であった。だからその民族認識は、同じ八旗に所属した満族やダグール族などとの相互関係のなかで構成され、維持されているのである。そこには漢族との関係とは別個の民族意識形成の場が存在する。

また民族史の理解においても、「少数民族」史という枠組みは、当該民族の歴史を1949年に成立した中華人民共和国の領域内に閉じこめてしまい、これが過去に遡及的に投影されれば、アナクロニスティックな様相を呈することになる。特にモンゴルのような、中国の外に独立国家を有する民族の場合深刻な自己分裂を生じさせることになる。長谷川報告が扱ったタイ族の事例でも、国境を越えたタイ・ビルマ側との往来や、ムンマオ王国という国家統治の経験の存在が、「中国のタイ族」というアイデンティティーのアーティフィシャルな性格を浮かび上がらせる。しかしその一方でタイ族とモンゴル族では、その違和感にかなりの温度差が感じられ

るのも事実である。それはおそらく両民族の国家統治の歴史的経験のあり方の違いに起因するであろう。

岡は中国の「少数民族」の形成に関わって、清朝滅亡後の中華民国初期における「五族」（漢・満・蒙・蔵・回）の区分が、清朝の帝国統治の区分から近代的民族区分への質的な転換と関わることを考慮する必要があると主張したが、このことは、清代におけるこれら北方の「少数民族」の地位と南方の諸民族の地位との明白な違いを意識すべきことを示唆している。それは清朝の国家論に関わる問題領域である。北方の王公統治と、南方の土司による統治は、清朝の国家統治において全く異なるレベルに位置づけられており、「少数民族」における世襲的統治としてのみ一般化することはできない。近年の満族史分野における「満族政権としての清朝」をめぐる議論は、中国の王朝史観を解体しながら、清朝の国家統治における非中国的性格を強調するとともに、満洲によるモンゴル統治の、中国の辺疆支配とは異なる文脈と性格を議論する可能性を開く。かかるガバナンスの歴史的差異の理解が、20世紀の歴史展開の果てに、漢族との関係における現在の民族意識のあり方の違いを解明する鍵となる。モンゴル史に関わる議論の多くが、民族独立の問題や、漢族との政治的な対抗関係に関心を集中させる傾向があるのは、その現れであろう。そこにはモンゴルにおけるネーションの歴史（民族史・国家史）を追究する問題関心が所在する。

しかしその一方で、現実の「中国」の統合プロセスが「少数民族」の意識に生み出す事態の解明も一方の課題として存在することを看過することはできない。

曾報告は、ミャオ族の民族教育における民族語教育と漢族との同化・融合の現実の相克を描きだす。氏が紹介した漢語と併記された民族語表記が、漢語の音訳にすぎないというブラックユーモアは、程度の差はあれモンゴル族にも共通する現象である。柳澤報告が扱う内モンゴル東北部のモンゴル人は、民族意識を有しながらも、すでに漢語を日常言語としている。あるいはすでに民族言語を失った満族や、もともと漢族と言語上の差異をもたない回族の場合も同様の問題の構図をもつ。それは「少数民族」としての各民族に、南と北の違いを超えて共有される問題領域である。

要するに、各民族がもつ歴史的経験や民族形成過程の差異の理解に立ったうえで、現代中国における「少数民族」として共有される事態の諸相を見据え、位置づけることが重要なのである。

歴史的なガバナンスの変容が現場の「民族」間関係に生じさせる問題が先鋭に顕現するのは、広川報告が扱う内モンゴル南部の「土地関係」の場面である。帝国統治下においては、外藩における漢人農民の存在が時にエスニックな衝突を生むことはあっても、統治区分上「他者」としての位置づけは明確であった。しかし民国がモンゴル人（王公属）と漢人農民（内地民人）を均質な地域住民として同一の統治カテゴリー上に位置づけた結果、文化的に異質なエスニック集団の共存を可能にしていた統治区分上の「他者」性（＝自立性）の枠組みは失われたのである。中華民国が漢族を主体とする国家統合を目指す以上、統治区分の消滅はモンゴル側により多くの喪失感を与えるであろう。しかし民国のモンゴル族政策は、一方で王公統治の維持

をも約束していた。それゆえ民族関係の相克はガバナンスの問題として維持され、地域住民のエスニックな関係の枠組みには回収されえないより政治的な問題領域が構成される。土地は誰のものかという問題は、地方の住民を統治するのは誰なのかという問題と結びつき、それが民族問題という構成を取ったところに、土地問題の近代的性格を見いだすことができる。

民族の自己意識を学術研究のレベルで問題とする場合不可欠と思われながら、事が「少数民族」に関わる場合、意外に置き去りにされることが多いのが、当の民族自身による自己意識に関わる言説そのものである。これには2つのレベルが存在する。ひとつは研究対象としての民族社会による自己意識の語りであり、もうひとつは当該民族の研究者・学界における学術的表象である。曾報告におけるミャオ族の例は前者に属するといえようが、ブレンサイン報告は、この両方のレベルに関わっている。氏が「中国」との関係性のなかで取り上げる内モンゴル南部のモンゴル人有力者の軌跡は、地方現地レベルにおける「中国」社会との関わりのなかで内モンゴル人の自己意識の内側に刻印された「他者」性を浮き彫りにすると同時に、それがモンゴル人研究者によって語られることによって、国際的なモンゴル研究のコミュニティーに方法上の問題提起をなすことになる。

当該民族が研究者コミュニティーを有するか否か、そして我々外国の研究者がこのコミュニティーを中心に据えた国際的研究環境を有しているか否かという問題がここにある。研究対象となる民族が研究者コミュニティーをもたない場合は多いだろうが、自前の研究環境を有している民族も数多い。モンゴル研究の場合、欧米

におけるフィロロジやオリエント研究から出発したという点では他のアジア研究と大差ない生い立ちをもつが、現在では個々の研究のレベルの優劣の問題はあるにしても、モンゴル国や内モンゴルを中心としてモンゴル人研究者による膨大な研究蓄積が存在する。しかも、社会主義体制下での研究も含めて西欧中心のオリエント研究を母体とした生い立ちゆえに、特に1960年代以降活発化したモンゴル現地での研究は、当初から国際的な広がりをもっていた。ウランバートルやフフホトで開催される国際モンゴル学会議の共通言語は、英語、ロシア語、中国語である以上にモンゴル語である。このことは、モンゴル人によるモンゴル国家史やモンゴル民族史の研究と叙述が存在し、これを流通させる学術研究環境が制度的に存在するというところをも意味する。ブレンサイン氏のようなモンゴル人研究者は、このような研究環境のなかで発言するのである。逆に欧米や日本の研究者も、モンゴルでの研究動向を先行研究として押さえることなしに研究は成立しない。このような事情が、モンゴルの民族的歴史認識の存立を、学術的なレベルで保証しているのである。だが、「モンゴル」という制度化された研究枠組みがもつ問題点の存在も無視はできない。

今回のシンポジウムのような課題は、モンゴル(史)研究と中国(史)研究の境界領域を構成する。それゆえ問題への接近の仕方によっては、「中国」的要素を強調することで一方的に中国国家史へ議論を回収したり、逆に「中国」部分を捨象することによって「真の」民族(史)研究へと純化するという、学術研究におけるポリティクスを抱え込むことになりかねない。「少数民族」という漢族を媒介項としてはじめて成

立する枠組みを選択した場合、中国の統合論理(モンゴルやタイにとっては分断の論理)を最初から前提として共有することになるわけである。その時「内なる他者」問題のポリティクスは、そのまま制度化された学術研究にも内面化することになる。同様の事情は、おそらく民国初の「五族」に由来する他の民族の研究(満学、チベット学、チュルク学、そして漢学)にも存在するだろう。漢族に関していえば、三尾氏のコメントが提起した台湾における「中国」の「他者」化の現実はそのようなポリティクスの一方向の露頭といえるかもしれない。

IV 今後の課題

「内なる他者」の問題とは、結局研究者が設定する研究枠組みや視野・視角に関わるのだといえるかもしれない。今回のシンポジウムでも、しばしば「南」をテーマとする研究者は「北」がわからず、逆もまた同様であるという、学界組織のあり方に起因する構造的問題の存在がうかがわれた。これを超克しようとするれば、既存の視野や視角の転換が不可避となろう。「南」と「北」を一つの視野に包含しうる学問的視圏とは何なのであろうか。両者の間に横たわる境界を越える作業は、単なる交流史の研究以上の何かでなければならないであろう。それが本シンポジウムを企画した我々の基本的な問題意識であった。「課題群としての東北アジア」がその回答たりうるかどうかは、個々の研究者の判断に委ねられることになる。

文献リスト

岡洋樹・高倉浩樹編 2002.『東北アジア地域論の可能性 歴史学・言語学・人類学・政治経済学からの視座』東北アジア研究シリーズ第4号, 東北大学東北アジア研究センター.

岡洋樹・高倉浩樹・上野稔弘編 2003.『東北アジアにおける民族と政治』東北アジア研究シリーズ第5号, 東北大学東北アジア研究センター.

瀬川昌久編 2005.『東北アジア研究センターシンポジウム 「中国研究」の可能性と課題』東北アジア

研究シリーズ第6号, 東北大学東北アジア研究センター.

寺山恭輔編 2006.『東北アジア研究センターシンポジウム 開国以前の日露関係』東北アジア研究シリーズ第7号, 東北大学東北アジア研究センター.

明日香壽川編 2007.『シンポジウム「地域協力から見えてくる地球温暖化」』東北アジア研究シリーズ第8号, 東北大学東北アジア研究センター.

(東北大学東北アジア研究センター教授)